様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６４５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７９２７６３

研究課題名（和文）うつ病を有する親の子どもへの家族を中心とした予防学的介入プログラム日本版の開発

研究課題名（英文）Development of a Japanese version of a family-centered preventive intervention program for children in families with parental depression

研究代表者
上野　里絵（UENO, RIE）

東京医科大学・医学部・准教授

研究者番号：２０５９８６７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：フィンランドの児童精神科医Solantaus先生が開発した精神疾患をもつ親の子ども（以下、子ども）を支援するための2冊のブックレット（親用・子ども用）日本語版を作成した。さらに、関東にある医療機関や相談機関を対象に、子どもへの支援に関する取り組みおよびブックレットの活用可能性に関する質問紙調査を行った。結果、回答者全員が、子どもへの支援は必要とし、現場での支援内容やニーズなどの実態が明らかになった。また回答者のうち約8割が、親用・子ども用のブックレットともに必要であると回答し、多様な活用可能性も示され、子どもと家族への支援においてブックレットを活用することは有用性が高いことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：With the aim of supporting children in families with parental mental illness, the present study created Japanese versions of two booklets (one for parents and one for children) originally developed by Dr. Tytti Solantaus, a Finnish child psychiatrist. Medical facilities and counseling services in the Kanto region were surveyed regarding the current state of support for such children and the application potential of the booklets. The findings clarified the current state of need and actual support in treatment and support settings, and all participants agreed that support for children in families with parental mental illness was necessary. A variety of potential applications for the booklets were identified, and about 80% of the participants responded that the booklets created for this study were necessary for both parents and children, suggesting that the use of such booklets would provide considerable benefit in terms of supporting children in families with parental mental illness.

研究分野：医歯薬学

キーワード：精神疾患を有する親　精神疾患を有する親の子ども　家族看護　日本語版

１．研究開始当初の背景

精神疾患を有する親の子ども（以下、子ども）は、精神疾患を発症するリスクが高く(Rutter, 1966; Rutter and Quinton, 1984; Beardslee et al., 1996)、また小児期及び成人期を通じて、精神疾患、行動あるいは情緒的問題をもちやすいことが報告されている(Beardslee et al., 1983)。子どものメンタルヘルスの問題への予防や早期介入に関する研究および方法論の開発に関する研究が注目されてきている。しかし、日本においてはエビデンスに基づいた子どもへの支援は、今のところない。

ハーバード大学の児童精神科医 Beardslee 博士は、精神疾患を有する親の子どもへの支援に関する研究および実践では、世界の第一人者である。そこで、Beardslee 博士らが開発した「うつ病を有する親の子どもへの家族を中心とした支援プログラム（Family Talk）」をはじめとする、精神疾患を有する親の子どもへのエビデンスに基づいた支援を探索し、日本への適用可能性検討することは必要である。

２．研究の目的

（１）Family Talk が適用されている各国の情報を収集し、各国の適用までのプロセス、効果、課題等について検討する。

（２）うつ病あるいは精神疾患を有する親の子ども、家族を中心とした支援に関する日本の実態や実情、現状を先行研究のレビュー、学会・研修への参加、質問紙調査などを通して明らかにする。

（３）（１）、（２）での研究や調査結果をもとに、Family Talk の日本への適用に際してのバリアーあるいは強み、利用可能な資源、現実可能性、課題などを検討する。

（４）Family Talk の翻訳

（５）ここまでの研究成果をまとめ、Beardslee 博士らに提示し、Family Talk 日本版についての協議などを行う。

３．研究の方法

（１）研究１

フィンランドの児童精神科医 Tytti Solantaus 博士が開発した、精神疾患を有する親の子どもを支援するためのブックレット（親用と子ども用）の日本語版を下記の方法にて作成した。

1 冊目：精神疾患を有する親が読む用のガイドブック（親用）

タイトル: How can I help my children – A guide to parents who have mental problems

日本語版タイトル：子どものためにできること‐こころの病気を抱えているお母さん・お父さんへのガイドブック

2 冊目：子どもが読む用のハンドブック （子ども用）

タイトル: What’s up with our parents? A handbook for older children and adolescents whose mother or father has mental health problems

日本語版タイトル：お母さん・お父さんどうしたの？お母さん・お父さんがこころの病気を抱えている子どもをサポートするためのハンドブック

①上記 2 冊のブックレットは英語のため研究代表者は、すべて翻訳した。

②海外の病院にて勤務経験がある児童精神科医に、医学用語をはじめとする専門的観点から、翻訳への校閲と助言を受けた。

③アメリカでの学士号を有し、海外での研究経験がある子どものメンタルヘルスを専門とする臨床心理士に、子どもの発達に応じた日本語訳をはじめとする専門的観点からの校閲と助言を受けた。加えて、翻訳は、原本の意味を損なわず、日本の文化や精神医療の実情を鑑みているかなどについても児童精神科医、臨床心理士とともにディスカッションした。

④本研究内容と関連するフィンランドの文化、教育、医療の実情等について、フィンランドセンター学術担当マネジャーより情報提供受けた。2 冊のブックレットは、フィンランド語から英訳され、一部英語の理解が困難な箇所があったため、フィンランドセンター学術担当マネジャーの協力を得て、フィンランド語のブックレットにて内容を確認した。

⑤日本語版作成において、原本と内容変更が必要な場合、Solantaus 博士に報告や相談した。日本語版作成のプロセスは、適宜、Solantaus 博士に報告した。

⑥翻訳作業が終了後、原本と同じデザイナーによるグラフィックデザインがなされ、研究代表者による確認と修正依頼を複数回実施した。

（２）研究 2

上記の方法にて作成した 2 冊のブックレットの日本における活用可能性を検討および親と子どもへの支援に関する現場での取り組みを明らかにするため、無記名自記式質問紙調査を実施した。

① 対象

関東地方にある精神科病院 67 か所（日本精神科病院協会ホームページ掲載）、関東地方にある精神保健福祉センター14 か所、東京都の保健所 30 か所、市町村保健センター31 か所、子ども家庭支援センター53 か所、児童相談所 11 か所、全国精神保健福祉連合会に所属している都道府県連合会のうち関東地方にある連合会 7 か所の計 213 施設を調査対象とした。

② 調査手順

調査対象とした施設長に、本研究への協力依頼を記載したフェイスシート、研究への参

加依頼書、研究説明書、無記名自記式質問紙、返信用封筒、ブックレット日本語版 2 冊等を同封した書類一式を郵送し、研究協力を依頼した。各施設長は、本調査への回答が適任と思われる者を選出した。本調査への理解および同意をした者が回答した。質問紙への返信をもって同意とみなした。

調査内容は、1)精神疾患を有する親と子どもへの支援に関する各施設の取り組みや実態について、2)2 冊のブックレットの活用可能性等であった。得られた回答は単純集計を行い、自由記述については、類似する回答をまとめた。

③ 倫理的配慮

東京医科大学医学部看護学科看護研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

４．研究成果

（１）研究 1

フィンランドの児童精神科医 Tytti Solantaus 博士が開発した、精神疾患を有する親の子どもを支援するためのブックレット、親用と子ども用それぞれの日本語版を作成した。

（２）研究 2

研究 1 で作成した 2 冊のブックレット日本語版の日本における活用可能性および、親と子どもへの支援の取り組みに関する調査結果を下記に示す。

① 回答率および回答者職種：

213 施設に調査を依頼し、60 施設（28.2%）から回答を得た。回答者の職種は、保健師が 43%と最も多く、次いで臨床心理士（15%）であり、その他に医師（11%）、看護師（9%）、精神保健福祉士（8%）など多様な職種から回答を得た。

② 親と子どもへの支援に関する各施設の取り組みに関する結果：

子どもへの支援の必要性については、回答者全員が「必要である」と回答していたことより、子どもへの支援に対する支援者の認識の高さが改めて明らかになった。

子どもへの支援については、約半数が行っていると回答し、支援内容は、「関係機関との連携、電話や面談による相談、家庭訪問」などであった。一方、「子どもへの支援は行っていない」とする回答者の理由は、「マンパワーの不足、具体的な支援方法がわからない」などであった。この結果は、現状とともに、今後の課題が示唆されたと思われる。

支援者が、子ども自身から相談を受けたことがあるとする回答は 47%であった。子どもからの相談内容は、「親の受診・入院に関する相談、親の病気に巻き込まれること、学校に行けない（親が心配のためなど）、家に居場所がない、様々な不安や心配（親の病気について、自分の人生はどうなるのかなど）など、多様な内容であった。子どもへの支援は、子どもを取り巻く関係機関や多職種との連携の重要性を示唆していると思われる。さらに、子どもは、どこに相談してよいかわからない、あるいは相談できずにいるといった状況が推察でき、さらなる調査の必要性があると思われる。

親からの子どもに関する相談では、80%が相談を受けたことがあると回答した。相談内容は、大きく分けて親自身に関することと、子どもに関することが示された。親自身に関する内容は、「育児・家事ができない、育児・家事などができないことへの罪悪感、親の病気や関わりが子どもに及ぼす影響、親子関係に関する相談」などであった。子どもに関する相談では、「不登校、成績不振、学力低下、発達に関する心配、ひきこもり」などであった。親と子ども双方への支援の重要性および必要性が改めて示唆された。

子どもに必要だと思う支援については、「適切な知識の提供、子どもが安心して生活できるように周囲が支えていくような支援、困っていることを誰かに相談してもいいことを伝える、年齢・能力・発達に応じたはたらきかけ」など、子どもの成長・発達に応じた支援の在り方が示された。

③ 2 冊のブックレットの活用可能性に関する結果：

親用と子ども用それぞれのブックレットにおいて、80%が必要であると回答した。また、親用と子ども用それぞれのブックレットにおいて、70%が「役に立つ」と回答した。

職場でのブックレットの活用意向については、親用では、「活用しようと思う」と「あまり活用しようと思わない」に各 50%の回答であった。子ども用では、「活用しようと思う」が親用と類似した結果であったが「活用しようと思わない」が 11%と、親用より高い結果であった。この理由の一つには、ブックレットの絵に関することが示された。ブックレットを職場で「活用しようと思う」の理由では、「支援者の学習教材として、面接などでの話題提供、外来に置いて自由に読めるようにする」など、多様な活用方法に関する意見が示された。一方、「あまり活用しようと思わない」または「活用しようと思わない」理由の自由記述では、「当事者には難しい内容がある、ブックレットの内容を説明できる人がいれば活用する」といった回答が示された。本ブックレットの開発者である Solantaus 博士は、精神疾患を有する親の子育てや子どもへの支援は、新しい取り組みであるため、支援者は支援に関する知識や経験を十分に持ち合わせていなく、支援への不確かさや不安を感じているとしている。Solantaus 博士は、こういった支援者の状況や気持ちを理解し、親と子どもを支援する支援者をサポートするためのものとしても本ブックレットは作

成された。日本においても、フィンランドの支援者と類似する状況であることが結果から推察されることより、支援者が安心して、また効果的にブックレットを活用できるよう、本ブックレットの活用方法や内容などを、日本語版作成者が、本調査結果や支援者のニーズを確認しながら発信していく必要性があると思われる。

（3）まとめ

フィンランドの児童精神科医 Tytti Solantaus 博士が開発した、精神疾患を有する親の子どもを支援するためのブックレット（親用と子ども用）の日本語版を作成した。子どもを支援するためのブックレットとして、親用は、日本では初めてであり、子ども用においても、青年期を対象にした内容のものは日本初のものである。

親と子どもへの支援に関する取り組みを明らかにすることおよび本ブックレットの日本語版の活用可能性の検討を目的に、関東にある医療機関、親や子どもへの相談・支援を行っている 213 施設を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。

現在行われている親と子どもへの支援、子どもに必要と思われる支援、子どもへの支援が行われていない理由などの実態が明らかになり、今後の課題が示唆された。

ブックレット日本語版においては、日本においても必要とされ、子どもと親への支援において、多様な活用可能性と有用性があることが示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

① 上野里絵、フィンランド版精神疾患を有する親の子どもへの支援に向けたハンドブック日本語版 (子ども用)の開発とその有用性の検討、日本精神衛生学会第 29 回大会、2013 年 9 月 21 日、宮城大学（宮城県）

② 上野里絵、フィンランド版精神疾患を有する親の子どもへの支援に向けたガイドブック（親用）日本語版の開発とその有用性の検討、日本家族看護学会第 20 回学術集会、2013 年 8 月 31 日、静岡県立大学（静岡県）

〔図書〕（計 0 件）

本研究にて作成した精神疾患を有する親の子どもを支援するための 2 冊のブックレット日本語版は、現在出版に向けて準備中

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
その他：
① Rie Ueno, A Study on the Utilization of the Japanese version of the booklets which was developed by Dr. Tytti Solantaus, 2014 September11, Högsand Finland

② 「第 2 回精神障がいの親と暮らす全国版子どもの集い・交流会」にて本研究で作成した 2 冊のブックレットを展示、2014 年 8 月 23 日、日本福祉大学名古屋キャンパス（愛知県）

③ 「精神障がいのある親の子育て支援＆精神障がいのある親と暮らす子ども支援に携わる者の情報交換会」、2014 年 5 月 24 日、日本福祉大学名古屋キャンパス（愛知県）

６．研究組織
(1)研究代表者
上野　里絵（UENO RIE）
東京医科大学・医学部・准教授
研究者番号：20598677

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし

(4)研究協力者
長田　洋和（OSADA HIROKAZU）
武田　俊信（TAKEDA TOSHINOBU）
髙瀬　愛（TAKASE AI）